

## 自己評価報告書

平成23年 4月26日現在

機関番号：10101

研究種目：新学術領域研究

研究期間：2008～2012

課題番号：20101005

研究課題名（和文） 帝国の崩壊・再編と世界システム

研究課題名（英文） The Collapse and Restructuring of Empires and Transformation of the World System

研究代表者

宇山 智彦 (UYAMA TOMOHIKO)

北海道大学スラブ研究センター・教授

研究者番号：40281852

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：比較史、東洋史、西洋史

## 1. 研究計画の概要

本研究計画は、帝国論が世界的に隆盛を見ていることを背景とし、近年ユーラシアで台頭しつつある地域大国が歴史的に何らかの形で帝国との関わりを持っていることに着目して構想された。中心的な研究目的は、ユーラシアの近代諸帝国史を実証的に研究したうえで、帝国的な過去が現在の地域大国の政治体制や世界認識、自己表象などにどのような影響を与えているか、また各時代の「帝国」的国際秩序の中で個々の帝国や地域大国がどのような位置づけにあるかを究明し、歴史的視点に基づく国家論を構築することである。具体的な検討課題は、以下の3点である。

- (1) 諸帝国が近代という時代にどう適応しようとし、どのような過程を経て崩壊したかを比較する。そしてその経験や記憶がどのような今日の意味を持つかを考察する。
- (2) 帝国の崩壊後に後継国が帝国の遺産と新しい国家原理の双方に基づく国家建設を行ったことが、今日の地域大国の力の基盤になっていると見て、その過程を比較する。
- (3) 世界システムの中でさまざまな時代の帝国・地域大国が持つ地位と役割を検討し、帝国と国民国家の関係を考察する。

## 2. 研究の進捗状況

これまでに16回の研究会・討論会を開き（Asian Association of World Historiansや日本国際政治学会などで組織したパネルを含む）、比較帝国論の諸論点に関する考察を深めてきた。研究成果・内容は多岐にわたるが、主なものは以下の通りである。

- (1) 植民地としてのロシア帝国領中央アジア

と英領インドを比較し、ロシア帝国とイギリス帝国全体の特徴についても考察した。いわゆるコラボレーター論に沿って、イギリス帝国が現地の協力者を情報収集や統治に積極的に使ったのに対し、ロシア帝国では現地民への不信感が強かったこと、しかし現地エリートがイギリス・ロシアを近代化の参照枠としたことは共通しており、中国を手本とはしなかったウイグル人・チベット人との違いが顕著であることを明らかにした。

- (2) ロシア帝国、清朝、オスマン帝国、イギリス帝国をめぐる国際秩序の変化を考察した。ロシア帝国が清朝やオスマン帝国に近代西洋的国際秩序を広める役割を果たしたこと、帝国間の関係や勢力争いにおいてしばしば小国や越境する人々が主体的な役割を果たしたが、長期的には大国による支配が拡大したことを確認した。

- (3) 国家意識や歴史認識の観点から諸帝国・地域の比較を行った。歴史認識とナショナリズムの関係については多くの地域に類似したパターンを見出すことができるが、特に古典的な大帝国・中国と新興の帝国・日本が対峙した東アジアにおいて、国家意識が極めて強く現れた経緯を明らかにした。また、国家がしばしば女性（時に男性）として表象されることに注目し、国家意識とジェンダーの関係を議論した。

- (4) 20世紀に進行した脱植民地化の意味を検討し、ソ連・中国の社会主義とインドの非同盟主義が、帝国的秩序に挑戦し脱植民地化を進めるというアピール力を持ち、各国が大国としての地位を得るのを助けたことを明らかにした。

- (5) 帝国論と現在の世界秩序や地域大国のあり方との関係を議論し、自由を尊重するアメ

リカが、自らの価値観への自信ゆえに対等な国家を許容しない「帝国」になっていった逆説や、帝国崩壊後の後継国家は帝国を反面教師とするが、帝国の領域を引き継いだ場合は結局帝國的な国家として再編を行うという矛盾を明らかにした。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

理由：研究会活動を活発に行い、さまざまな時代・地域の事例を取り上げつつも、コラボレーター論や脱植民地化論など比較のための軸をいくつか決め、生産的な議論を行うことができた。これにより、当初定めた検討課題の解明の方向を見定め、研究期間後半にさらなる成果と明確な結論を出すための準備ができた。

### 4. 今後の研究の推進方策

引き続き研究会を随時開くが、これまでは議論を深めることに重点を置いたのに対し、今後はまとまった最終成果を出すことを主要な目標とする。特に、2012年1月の国際シンポジウムの開催と、研究期間終了時に刊行する本の編集に力を注ぐ。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 44 件)

① Akita Shigeru (2010、査読有) “World History and the Emergence of Global History in Japan,” *Chinese Studies in History* 43(3), pp. 84-96.

② 池田嘉郎 (2010、査読有) 「ユーラシアの地政学としてのソヴィエト建築学：モスクワ、ノヴゴロド、北京」『地域研究』10(2)、90-108頁。

[学会発表] (計 32 件)

① Uyama Tomohiko, “Mutual Relations and Perceptions of Russians and Central Asians: Preliminary Notes for Comparative Imperial Studies,” *First Congress of the Asian Association of World Historians*, Osaka, 31 May 2009.

② Kawashima Shin, “The Image of Asia in Modern China: Historiography of the Traditional Chinese ‘World Order’,” *First Congress of the Asian Association of World Historians*, Osaka, 31 May 2009.

[図書] (計 18 件)

① 山室信一 (2011) 『複合戦争と総力戦の断層：日本にとっての第一次世界大戦』人文書院、全 174 頁。

② 菅英輝編 (2010) 『冷戦史の再検討』法政大学出版局、全 357 頁。

[その他] ホームページ：  
[http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group\\_04/index.html](http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group_04/index.html)